

山と女子の 今昔ものがたり

第一集 京都・御嶽山・屋久島



田中香・杜岡遙・高田みかこ（著）

同期書院

まえがき

山と女子——この二つが出逢うとき、いったい何が立ちあらわれるのだろうか？

著名な女性登山家たちの手記を繙けば、その片鱗に触れる思いがする。けれど同時に、そこにはどこか「登山家」としての、いわゆるマツチョヨさが香り立つことも否めない。私たちが追いたいのは、それとは少し違う、もっと奥深い「山と女子」の神秘だ。そのヒントは、もしかすると白洲正子さんの著作『かくれ里』などに潜んでいるのかもしれない。彼女の文章の、抑制された表現の奥には、力強く、野太い、ある種の「なにか」が息づいている。

白洲さんの魅力について、青柳恵介氏が寄せた、まさしく愛に満ちた評論の一部をここに借りて、その「なにか」への手掛かりを探ってみよう。

まず、山中の「かくれ里」へ至る「道行き」について

『(前略) 白洲さんの「道行き」の魅力は、地名を連ねて行くことによって、長い年月の間に作られた各々の土地のイメージを髣髴とさせ、一種の土地誉めを述べることによって文章自体が土地々々のエネルギーを吸収獲得して行くという、古代的な「道行き文」のあり方を踏んでいる所にあるだろう。』

さらに、そこに対峙する女性性(母性)について



★
40代前半の頃の白洲さん

『(前略)『かくれ里』にはいかにも貴やかな女性らしい文章が随所にある。たとえば、「油日あふらひから櫟野いしのへ」の章で現れる、油日神社蔵の「ずずいこ様」を語るくだり。「あられもない格好の」大らかで力強い人形が、青空の下で農耕の神事に用いられる様子を叙した辺りは、催馬楽さいばくなどの古代歌謡にも通じる明けつひろげの性の充実感がみなぎっている。人々の哄笑までが聞こえて来そうだ。』(以上、「人と作品『かくれ里』の魅力」 講談社文芸文庫『かくれ里』より転記)

青柳氏が捉えた白洲さんの「野生」は、かくれ里が姿を消しつつある現代において、かえって一層強く私たちに訴えかけてくる。この「野生」の閃きを羅針盤として、私たち四人の視線が改めて「山」へと注がれるとき、そこにはやはり、力強く、野太く、時に不可思議な生命の営みが、今も昔も変わらず息づいているのが見える。時代という垣根を軽々と飛び越え、本書は、その確かな息吹を捉え、書き残したいと願う。

『

波母山はもやまや小比叡こひの杉のみ山居は

嵐も寒し訪ふ人もなし

なんとなく呪文じゆもんめいて聞えるこの歌は、山の静寂と、山に籠る人の孤独をよく現わしている。比叡の神の神詠といわれるのも、名もない巫女みこが、ある日自分の体験を、ふと口ずさんだのが神の言葉として受けとられたにちがいない。神

と巫女との間に、ひめやかに行われた山上の祭りは、次第に里へ降りて来て、盛大な「山王祭」として民衆に親しまれるようになって行つた。』（以上、『かくれ里』より転記）

そう、きっと、現代において山へと分け入る女性たちもまた、いにしえの巫女のように、時代の「兆し」をその身に感じ取り、それを報せながら、次なる世代と共に、あるべき道へと静かに、しかし確かに歩みを進めていくのに違いない。

謝辞

本書の執筆に際し、お世話になった方々（敬称略）として、大平徹、梶川敏夫、咲本英恵、四釜尚人、繁田信一、中尾裕也、西森拓、福家俊彦、山田祐基（助言・励ましと助言を戴いた先輩、同僚、友人）、諏訪恵里子、矢谷左知子（書を揮毫してくださった方々）、山口勝廣（写真を提供戴いた方）、内藤佳代子、田中和子、田中聡、田中久米四郎（編集・出版協力者）、および直接・間接に協力いただいた方々すべてに感謝する。

東京・京都・屋久島間の道中にて

田中香・杜岡遥

京の山・今日の山

はじめに

骨董と長くつきあっていると、どうやら自分の中に、古いモノやコトへ向けて鋭敏に反応する「センサー」のようなものが育ってくるらしい。^{●1} この内なるセンサーは、初めて訪れた土地で、路地裏にひっそりと隠れた古道具屋などを目敏く見つけ出してくれる、なかなか便利な相棒でもある。

だが、モノやコトだけに留まらない。場所そのもの、土地が纏^{まと}う気配に対しても、このセンサーが反応する人間がいる。まえがきでも触れた白洲正子さんの紀行文からは、彼女がいかに土地と深く感応していたか、その控えめな筆致の奥から、なにか濃厚なものが伝わってくる気がするのだ。

そして、かくいうわたしもまた、骨董との長い対話を経て、このセンサーを身体の内にとっかりと組み込んでしまったのだ。だからだろうか、京の山を歩けば、このセンサーは途端に騒ぎ出し、時にわたし自身も予期せぬ行動へと駆り立てる。^{●2} いったいどこで、どのようにこのセンサーは反応し、わたしをどこへ導こうとしているのか。その軌跡を、ここに辿ってみよう。

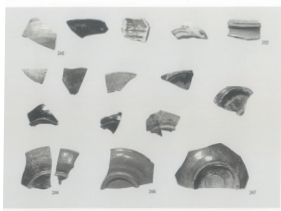
★1 『かくれ里』『古典の細道』『近江山河抄』『十一面観音巡礼』（講談社文芸文庫）等。

★2 『平安時代山岳伽藍の調査研究―如意寺跡を中心として―』江谷寛坂詰秀一 古代学協会（2007）

●1 平安頃のありがちな猿投^{さなげ}の椀と拾ってきた石



●2 このような平安時代の焼きものが京の山には出土する。
（★2より転載）



大文字・如意越えの道

わたしの住まう栗田口からは、北東の方角に送り火で名高い大文字山が、その少し北には比叡の峰が静かに横たわる。実家、京の山を歩き始めて幾十年とりわけこの二十年は、正月三が日のいずれかに、決まって大文字山から「如意越え」の道を辿ることになっている。

この如意越えは、古く平安の頃には既に存在し、京と近江を結ぶ山中の最短路であったという。時には政争に敗れた者たちの、都からの避難路ともなったらしい。実際、道は逢坂の関を北へ迂回するように、当時の治外法権であった長等山園城寺（三井寺）の境内へと通じている。

その山越えの京側の入り口は、大文字山の西麓、鹿ヶ谷^{ししがたに★₃}にある。平地と山のあわい、なんとも言えず魅力的な均衡を保つこの界隈は、いつか住んでみたい気にさせる場所だ。

鹿ヶ谷から桜川の沢沿いを東へ一時間ほど進むと、大文字山頂^{★₄}と如意ヶ岳^{にょいがたけ}への分岐点に行き着く。わたしの内なるセンサーは、いつも決まってこの分岐点近く、ある特定の場所で強く反応するのだ。^{●₃}冬枯れて明るく開けた尾根筋に、それは「？」という巨大な疑問符を投げかけてくる。「山頂近くに、なんだ、

★₃ 故梅原猛先生のお住まいの地（若王子）。最近では、森田真生先生の鹿谷庵^{ろくやあん}もある。この界隈、確かに鹿が多い。

★₄ 少々混乱を招くのは、この大文字山山頂が如意ヶ嶽^{ろくやあん}であって、如意が岳は、これよりも近江よりにある。

●₃ 山頂近くの「公園」

（実は如意ヶ嶽城跡と後に知る）



この公園めいた広がりとは？」と、言葉にするならそうなるだろうか。

もつとも、山中の平坦な場所なら、鹿ヶ谷から分岐点に至る途中にもいくつかあり、センサーは微かに反応はしていた。だが、それらは平地に近い里山ゆえ、おそらく炭焼きや椎茸栽培のために拓かれたのだらうと、勝手に解釈して通り過ぎていたのだが。⁴

さて、如意越えの道は、先ほどの分岐点から大文字山頂とは逆、如意ヶ岳（標高472m）方面へと向かう。山頂を巻いていけば、鹿ヶ谷から三井寺^{★5}の裏手まで、健脚ならば三時間ほどの道のりだ。途中、尾根筋を東へ進むと、「雨神社」と呼ばれる窪地を経る。神社の右手（南側）には杉林が広がり、左手（北側）には谷間へと下る林道がある。その先には、尼僧が切り盛りするらしい池ノ谷地蔵と薬草園^{★6}がある。

雨神社の手前あたりから、道の苔は心なしか深みを増し、このあたりに水脈が通うことを示唆する。そしてわたしのセンサーは、言うまでもなく、この雨神社周辺で最高潮に反応したのだった。

「なんですの、この気配？ まるで深山幽谷やないの」と。それもそのはず、かつてここには樹齢二百年は優に超えるであろう檜の古木が数本そびえ、^{ほしちう}祠を

★5 『(前略)三井寺は、正式名称を「長

等山園城寺」といい、天台寺門宗の総本山です。平安時代、第五代天台座主・智証大師円珍和尚の卓越した個性により、天台別院として中興されました。以来今日まで続く千二百年以上の歴史の中で、(中略)智証大師への信仰に支えられた人々によって支えられつつ、苦難を乗り越えてきた様から、「不死鳥の寺」としても知られています。』(三井寺HPより)

★6 池ノ谷地蔵、薬草園の界隈に、10年前まで侘びた蕎麦屋と丸薬屋もあったはずが、数年前に掻き消すように失われた。

●4 鹿ヶ谷近くにて
(実は「能野三所跡」と後に知る)



囲み、水場からは清水が絶えず湧き出していたのだ。

ところが、である。2014年頃だったか、おそらく相次いだ台風や前線の影響で、これらの古木はことごとく倒れ、無残な切り株と化した。^{●5} 侘びたトタン屋根の祠もろとも倒壊した。この時すでに、深山幽谷が「近所の公園」へと豹変する兆しはあったのかもしれない。

その予感は的中し、昨年2024年、とうとう清水が涸れた。周囲を見れば、なるほど、祠の裏手の斜面に生えていた杉もほぼ全滅状態である（写真右）。そして今年2025年、ついに重機が入り、倒木すら撤去され、あたり一帯は更地同然となった。センサーの反応はもはや「ココ掘レ、ワンワン」ではなく、「ココ掘レドモ、水ナシ」だ。^{●6} 祠だけは、こぎれいに、モダンに再建されているのが、かえって物悲しい。

少し植生に触れておくと、如意越えは「雨神社」あたりから如意ヶ岳山頂付近まで杉と檜の植林地が続く。そこから近江側へ進むと谷筋は見当たらない、平板な照葉樹林へと変わる。おそらく「雨神社」の下手、南斜面は水に恵まれ、杉の植林に適していたのだろう。事実、この区間を歩くと、いくつもの谷筋を越えていく。この「谷筋」が、後々の重要な脇役となるのだ。

「雨神社」周辺の激変もさることながら、その先の南斜面の杉林の荒廃もま

●5 『雨神社』周辺 檜の大木数本は切り株に、背後の杉林に荒廃が進む



●6 雨神社の水場 かつては水を貯えていた筈

